

牛久：学校周辺に見る自然

第23号 牛久自然観察の森

2016年1月30日発行

< 冬の自然観察 ～牛久自然観察の森 >

皆さん、こんにちは。冬の自然観察、今回は牛久自然観察の森です。



ルリビタキの若いおす(左)とシメ(右：下は木の実を食べている)。

まずは、北の国や地域からやって来て冬をこす鳥から、ルリビタキとシメ。ルリビタキは夏に亜高山帯の針葉樹林で繁殖し、冬に平地の雑木林で過ごす鳥で、このような国内で短距離の移動をする鳥を「漂鳥」といいます。なお、パッと見てこれはメスと思いましたが、あとで写真をよく見ると、翼のつけ根が青みを帯びていることなどからオスの若鳥であることが分かりました。しっかりと観察の眼を身につけたいものです。そしてシメも多くは漂鳥ですが、こちらは夏に北海道で繁殖し冬に本州の林で冬をこすようです(中には、もっと北の国で繁殖し渡ってくる冬鳥もいるそう)。

対して日本で一年中暮らす鳥を「留鳥」といい、メジロ、カワセミ、ヒヨドリなどが見られました。



メジロ(左上：虫を食べる)、カワセミ(右上)、ヒヨドリ(左下：センダンの実を食べる)と、モズのはやにえ(右下)？

続いて、昆虫の冬ごしです。



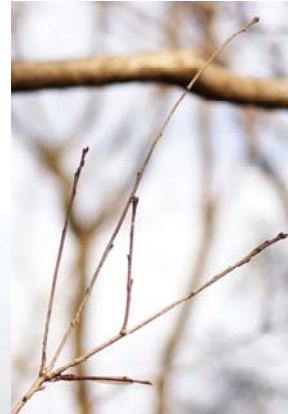
ウメの枝の分かれ目にイラガのまゆ(左上), オオミノガのみの(右上), ヨコヅナサシガメ幼虫の集団越冬(下)

イラガのまゆの中には、「前蛹」とよばれる蛹の一步手前の虫が入っています。そして、オオミノガなどミノムシのみのの中には、終齢幼虫が入っています。そのような防寒具?を持たないヨコヅナサシガメの幼虫などは、集団で幹のくぼみなどにかたまつて冬をこします。



ホソミオツネントンボ、どこにいるか分かりますか?

さて、成虫で冬をこすトンボとして何度も紹介してきたホソミオツネントンボですが、この日も数カ所で見つけました。左の写真などはみごとな枝ぶり?ですね。ただし、このトンボ、ひと冬まったく動かずにじっとしているわけではなく、カメラに気がついてわずかに動いたり、日にちがたつと近くの別の場所に移動していたりします。左の写真のものは、1週間たって、同じ枝の先からつけ根に移動していました。



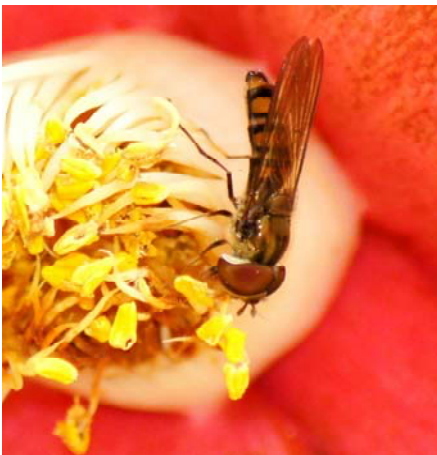
少しずつ移動することも。
左・中上：1月19日
右・中下：1月26日



上向きに並び集団で冬をこすヤマギシモリノキモグリバエ(左)と、早咲きのウメの蜜や花粉をなめるナミハナアブ(右)。

成虫で冬ごしする昆虫の中にも、集団でかたまるものがあります。有名なのはテントウムシですが、この日はヤマギシモリノキモグリバエが見られました。どれもほぼ上向きに並んでいます。写真はユズの葉ですが、ツバキやヒイラギの葉でもよく見つかります。

そして梅園では、1月半ばには咲き始めていたウメで、ナミハナアブがしきりに蜜や花粉をなめていました。



ツバキの花粉をなめるホソヒラタアブの冬型(左・中)と、ハナバエの仲間(右)。



ハナアブの仲間はツバキの花粉もなめていました。何度も紹介してきたホソヒラタアブですが、少しもようが違うので始めは別の種類かと思いました。冬型なのだそうです。ツバキにはハナバエの仲間も来ていました。ハエやハナアブはこうして、陽射しが出て暖かくなると活動します。最後の1枚は、ガガイモの種子散布です。【理科支援員：宮内】

風によって種子が飛んでいく、ガガイモ。